



「○○」は何か」という定義にまでも応えることは難しい。その本質を短くことは表現することは殆ど不可能だからである。例えば「日本文化とは何か」という問いは、普段その言葉を頻繁に使っていないながら、定義できることは稀だろう。

しかし「○○」にはいろいろな特徴がある」とその属性をいくつか(すべてではなく)挙げて表現することは比較的容易である。またその特性も他のものと比較して表現すると一層分かりやすい。

そこで日本文化の属性を西欧文化と比較してみると次の

るな場面で登場するが、最も特徴的なものが、日本文化が宇宙を「非実体性」とみることだ。これは世界には不変のもの、永遠に変わらない固定した実体というものはないという思想だ。世界は相互の関係の中で絶えず移ろいでいる

はやや少ないが、それでも日暮れ、夕暮れ、夕べ、薄暮、黄昏(たそがれ)、宵の口、小夜、夜更(しんごう)などがあり、これほど移行期の語彙が豊富な言葉は世界にないであろう。季節や月の移ろいについても同様な繊細さをもつ。

これらを見ているうちに感じることは、これこそ生命のあり方そのものではないかということだ。生命体とは、独立し、固定した実体ではない。生態系の基本にある「物質循環」により、無機物(例えば炭素)が植物の光合成によって有機物

日本文化と自然の親和性

よようになる。

人間中心主義―自然中心主義、理性尊重―感情重視、合理主義―非条理の受容、科学主義(因果律)―直観、必然重視―偶然容認、物質主義―精神主義、絶対主義―相対主義、普遍主義―多様性、二元論―多元論、進歩主義―循環論、個人主義―個は全体の一部、言語重視―非言語重視、ルール主義―モラル重視、父性的―母性的。またまたある。こうして思う(はまま)属性を並べて気づくことは、日本文化(思想)は、自然の摂理と極めて親和性が高いということである。それはいろいろ

流れであると考ええる。

例えば西欧では、一日を昼と夜に二分するが、日本では一日は明るさと暗さが連続的に変化する流れと捉え、特に明と暗の境目の移ろいを愛でる。太陽が燦爛と輝く昼間や闇夜より、刻々と色が変化する朝焼けや夕焼けに感動する。夜から日が昇るまでのわずかの時間帯を表す言葉として、未明、夜明け、朝明(あさぼらけ)、鶏鳴(けいめい)、暁(あかつき)、東雲(しのめ)、曙(あけぼの)、有明、黎明(れいめい)、払暁(ふつきょう)、彼は誰時(かたれどき)などがある。夕方

として生物界に入り、草食動物、肉食動物の体を構成し、排せつ物や遺体を通して自然界に戻る。われわれが食べた分子は、瞬く間に全身に散らばり、しばらく留まった後、身体から抜けていく。生命とは「動的な平衡状態」にあるのだ。

古来日本人は、こうした生物学的知識がままに、それを感じ取り、日々の生活の基本に据えてその文化を形造ってきたのだろう。日本文化が自然と親和性が高いのは当然のことなのだ。

(近藤文化・外交研究所代表)